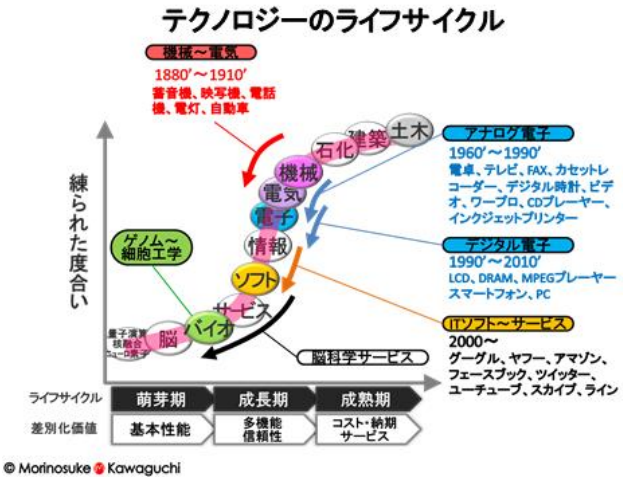
「2023年、産業界はこうなる」

日本企業は何で食っていくのか？

(株)盛之助 代表取締役社長　　川口 盛之助
Morinoske Co. Ltd.　CEO　　Morinosuke Kawaguchi

世の中こぞって「未来予測ブーム」である。日本だけではない。先進国全般に黄昏感が漂っているためだ。2005 年から顕著になったエマージング諸国の台頭、100 億人に至るとも言われる人口爆発には「地球の定員超え」説もささやかれ、サステナブルブームを巻き起こしている。一方で少子高齢化に苛まれる先進諸国は延命策を暗中模索している。その傍らでヒト・モノ・カネ＆情報の移動性は飛躍的に高まっている。情報はクラウドコンピューティングという仮想化手法で処理され、ビジネスリソースはクラウドソーシングでオンデマンド調達されるようになった。これによって全てのイベントのライフサイクルは加速する一方だ。こうして新興国は先進国に高速に追い付くことができるようになってきた。しかし同時に、その新興国も後発国に更に高速に追い付かれるという矛盾がある。追い付く前に追い付かれてしまう。そうこうしているうちに、自国民自体の少子高齢化現象にまで追い付かれてしまう。国力の源泉となる技術資本や社会資本を蓄える間もなく勢いがしぼんでしまうことも見えているのだ。それでもぼんやり立ち止まる余裕はない。最後のバスに乗り遅れまいと、新興諸国は速度優先であらゆるものをパッケージソリューションで導入する。ハリボテと知りつつも、より高速に近代都市を作り上げなければならない。いまや強大化した市場の圧力は国家権力をも上回り、国家は市民権すら乱発して富や技術を持つ人々の国際争奪戦を繰り広げている。



この種の人口動態的な未来像については各方面で様々に語られている。未来の価値を生み出す役割の事業企画や研究開発に携わる人々にとって、これらの知識は必須の基礎教養である。しかしそれだけでは足りない。他に先駆けてイノベーティブな価値を生み出すためには、「価値の変化」に対する理解が不可欠である。個々の技術の未来像ではなく、価値自体がどのように動いているのかをシステマチックに考えるセンスが求められる。そのためには 2 つの視点での全体把握が有効である。一つは専門領域を超えたメタ視点で、世のイベントの関係性を考えるアプローチだ。自然科学、人文科学、社会科学と、三つの科学は知恵の体系であり、人間や社会の課題を解くための打ち手として考えられた創意工夫の結露である。脳科学やサービスサイエンスの時代には科学の重心が人文・社会科学側に振れていることを受け入れなければならない。本講では専門分野の関係性をソーシャルグラフ化処理して、普遍的に起きているメガトレンドを分析する。今一つの視点とは、科学や技術領域自体についてライフサイクル視点で捉えるセンスを指す。現在「露天掘り」のようにビジネス化〜換金されるアプリケーションが出ている「時代の主役」技術と、原理自体が学術分野で頻出する「今後の主役」領域の関係とは何か？過激なまでにつながって、限りなくオープンでフラットな社会環境がやってくる。そこではポスト工業化（サービス産業化）が加速的に進行する。その時に日本の産業はどうなるのか？本講では鳥瞰の目線で全体の価値の行方について考えてみたい。

川口 盛之助

1961 年生まれ。慶応義塾大学工学部卒、米イリノイ大学理学部修士課程修了。日立製作所で材料や部品、生産技術などの開発に携わった後、アーサー･D･リトル（ADL Japan）に参画。同社アソシエート・ディレクターを務めた後、2013 年株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを行う。近著「メガトレンド」では、独自の方法論から導き出す精緻で広範な未来予測分析を行い、各界で高い評価を受ける。同書の世界観をベースにした文科省の将来社会ビジョン策定プロジェクトや、自民党の「国家戦略本部」におけるビジョン策定などにも携わる。レクチャーの達人としても知られ、TEDxTokyo での ToiletTalk は４０万回再生という異例の反響を得ている。morinoske.com